モンゴル国ヘンティ県における契丹・女真文字岩壁銘文４件

第４回契丹文字研究会（2005 年 9 月 11 日）

松川　節

調査時期

2005 年 8 月 18 日～ 23 日

調査地域

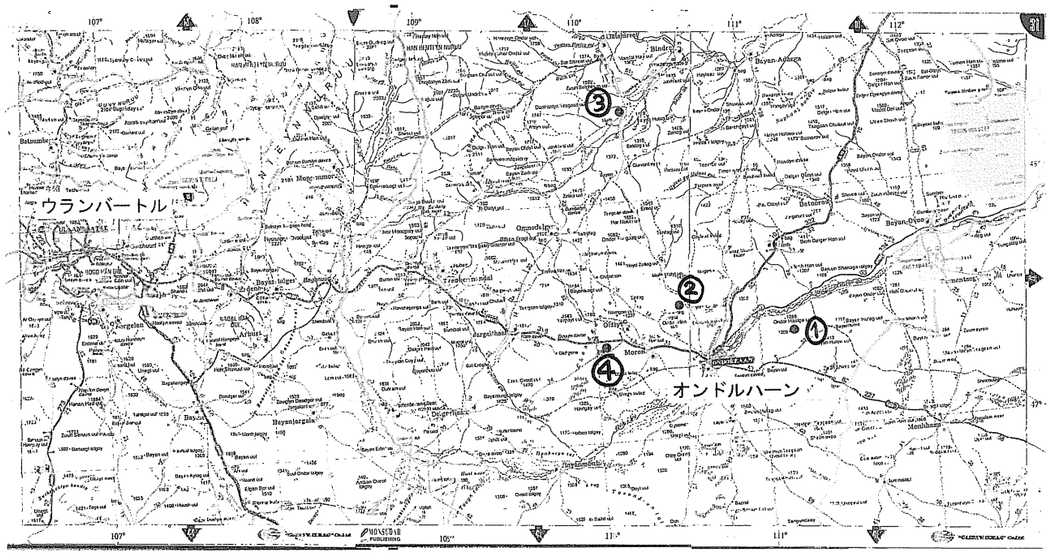
モンゴル国ヘンティ県

調査メンバー

松田孝一（大阪国際大学），村岡倫（龍谷大学），松川節（大谷大学），オチル（モンゴル国立歴史民族博物館），オヨンジャルガル（東北大学大学院）

調査行程（【　】内は走行距離）

8 月 18 日：ウランバートル⇒ホドゥー＝アラル（ツーリストキャンプ泊）【235 キロ】
8 月 19 日：ホドゥー＝アラル・ツーリストキャンプ⇒アウラガ遺蹟⇒オンドル＝ハーン（ホテル泊）【170 キロ】
8 月 20 日：オンドル＝ハーン⇒**①セルヴェン＝ハールガ銘文⇒②エルデネ＝オール銘文**（野営）【169 キロ】
8 月 21 日：エルデネ＝オール銘文⇒**③アラシャーン＝ハダ銘文**⇒オグルグチィン＝ヘレム（ツーリストキャンプ泊）【120 キロ】
8 月 22 日：オグルグチィン＝ヘレム・ツーリストキャンプ⇒オンドル＝ハーン（ホテル泊）【152 キロ】
8 月 23 日：オンドル＝ハーン⇒**④サルバル＝オール銘文**⇒ウランバートル【389 キロ】



①セルヴェン＝ハールガ銘文（女真文字・漢字）

先行研究

日本・モンゴル共同「ゴルバン・ゴル」計画（1991 年調査成果）

『讀賣新聞』1991 年 11 月 3 日付け（東京版 1 面）

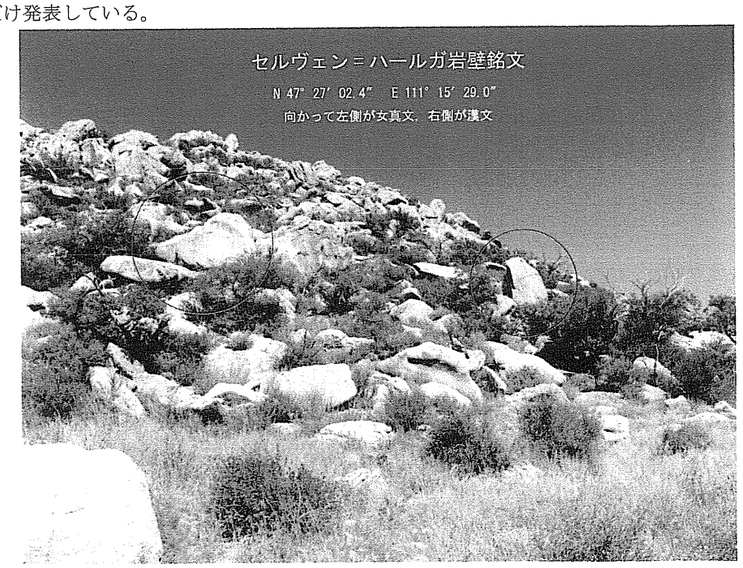
「金」戦勝の２碑発見　チンギス・ハーン応援、タタル討伐／ゴルバンゴル調査隊

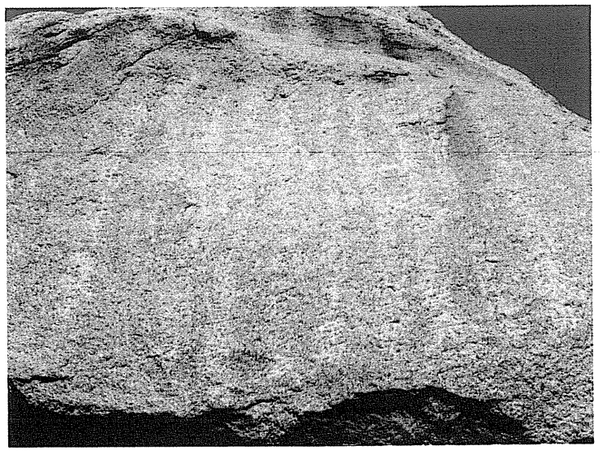
◆ 12 世紀「元朝秘史」裏付け

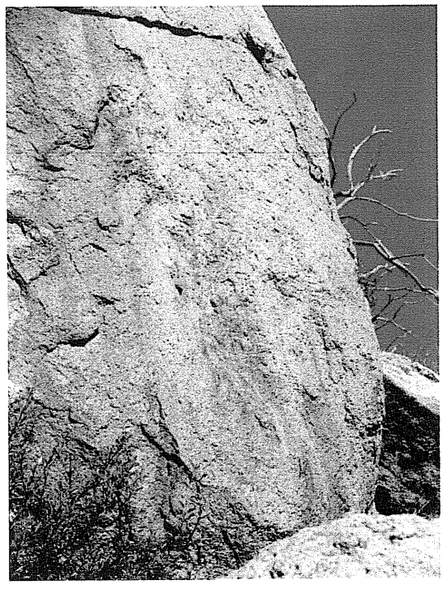
【ヘンティー県バヤンホタク郡（モンゴル）で、江本嘉伸】十二世紀末、金国皇帝の命によりタタル族討伐に遠征、チンギス・ハーンらの応援でタタル軍を打ち破った金軍（将軍、王京丞相＝おんぎんじょうしょう）の戦勝を記念する二つの歴史的な碑文の存在が、日本モンゴル合同ゴルバンゴル調査隊の学者によって突きとめられた。この戦いは「元朝秘史」に記され、金の正史「金史」には、碑文そのものについての記述も残されている。それが実に八百年ぶりに現地の考古資料によって裏付けられたことになる。チンギス・ハーンはこの戦いでの戦功で、ケレイト族の長、トオリル・カンと共に特別な称号を授与されており、多くの民族が覇を争った中央アジア史に具体的にかかわる貴重な発見である。

◆漢字と女真文字　一部解読

碑文があったのは、ウランバートル東方四百キロ、ヘンティー県のバヤンホタク・ソム（郡）の平原の奥にそびえる岩峰群の一角。ゴルバンゴル調査日本側隊長の加藤晋平・千葉大教授（考古学）、モンゴル側のモンゴル科学アカデミー歴史研究所のオチル所長、ツェベーンドルジ考古学部長、シャグダスレン・モンゴル国立大学付属モンゴル学研究所所長らが共同で確認した。モンゴルの学者は先に碑文の存在を知っており、シャグダスレン所長は一九八六年に調査、「女真文字のもの」とだけ発表している。







十月十六日から三日間の調査で、今回はその碑文とは別に同じ山の中腹だが十八メートル東へ離れた場所に新たに漢字の碑文を発見、加藤教授が一部を解読したところ、双方がほぼ同じ意味を持つものと判明した。

女真文字の碑文は、高さ、幅各三・四メートルほどの三角形の立派な岩に、九行、各行十一から十六文字が彫り込まれている。漢字碑文は高さ四メートル、幅三メートルのたて長の大石にやはり九行、ほぼ同じ字数が彫られているが、壁面のかなりの部分が剥落（はくらく）しており、全文の解読は不可能な状態だ。

加藤教授によれば、女真文字の一行目は「大いなる中央の金国尚書右丞」と読め、「金史」に見える「右丞相完顔襄」、モンゴル語発音の「王京丞相」のことを指すことは明らか。また、「軍隊」という言葉が二度出てくるほか、「賊」「捕らえた」などの表現が読み取れるという。

さらに、漢字碑文の八行目には「明昌七年」と読み取れる部分があり、金がタタルを討つ原因となった明昌六年（一一九五）の反乱直後を意味するとみられる。

現場は、通称「セルベン・ハールガ（ぎざぎざの門）」と呼ばれる岩峰群が点在する独特の地形で、「金史」の「九峯」の表現がぴたりあてはまる。広大な平原を見下ろす岩山のふもとには、墓が二基あった。

碑文の一部解読に成功した加藤教授は「今後モンゴル、日本双方の専門家の協力を得て、できるだけ全文解読したい。まれな大発見で、興奮しました」と語っている。

（注）女真文字は十二世紀、中国東北部に住んだツングース系の女真族が漢字と契丹文字の影響を受けて作った文字。

◆解読の結果楽しみ

「モンゴル秘史」の注釈で知られる村上正二・東京都立大名誉教授の話「チンギス・ハーンの父イェスゲイ・バートルはタタル族に毒殺されており、その恨みからチンギスは金軍のタタル討伐に率先して参加したわけですが、その時の戦いを記念する碑文が見つかったのだから、大変なことです。解読が進んで何が出てくるか楽しみです」

②エルデネ＝オール銘文（契丹文字）

先行研究

Kh. Perlee, “Kidanchuudyn bichgijn dursgal mongoloos oldson n’.” *Khel zokhiol sudlal* 13, 1979, pp. 15-30.

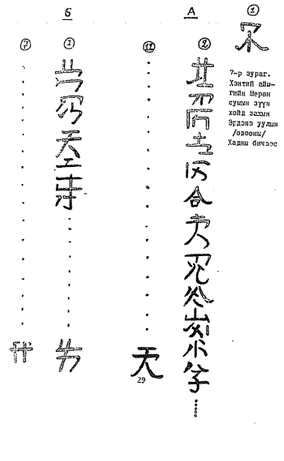
（Kh. ペルレー（著）「契丹人の文字資料がモンゴルで発見されたことについて」『言語研究』13, 1979, pp. 15-30.）

「7. エルデネ（オヴォーニィ）オール・岩山の未確認銘文」として，未確認文字による２つの銘文に言及。

1. 右から左へ計12行。第１行は１文字のみで一字擡頭。第２行は13文字あるも確認できるのは12文字のみ。
   最終行（12行目）は最後の一文字のみ記録（図中のＡ）。
2. 計７行。各行10～11文字。（図中のＢ）

モンゴルの研究者は，漢文ではなく，契丹文であろうとしている。





③アラシャーン＝ハダ銘文（契丹文字）

先行研究

日本・モンゴル共同「ゴルバン・ゴル」計画（1991 年調査成果）

『讀賣新聞』1991 年 8 月 2 日付け（東京版朝特Ａ）

秘史語る文字群　北アジアで興亡繰り広げた諸民族記す／ゴルバン・ゴル特集

◆「大明皇帝着來」　墨書発見の奇岩ビッシリ

「大明皇帝着來」――。チンギス・ハーンの生まれ故郷、モンゴル北東部、オノン川流域の大草原を見下ろすビンデル山の奇岩、アラシャン・ハダの岩面に記された墨書の発見は、ハーンの陵墓を探索する今年度のゴルバン・ゴル計画の最大の成果だった。墨書は明の永楽帝の「オノン河畔の戦い」を考古資料から実証しただけではない。岩面に残されたさまざまな種類の文字とともに、多くの民族が興亡を繰り返した北アジア史解明の重要資料であり、その中にチンギス・ハーンの陵墓のナゾを解くカギが潜んでいる可能性も高い。（ウランバートルで矢沢高太郎、写真・青木久雄）

◆モンゴルの聖地　期待される解読

「ここはチンギス・ハーンが生まれ、十三、四歳までの幼、少年時代を過ごしたといわれる土地。この岩の前に若き日のテムジンが立ったことは間違いない。そこへ、あの永楽帝も来ていたとは、なんという歴史のロマンだろう」

日・モ合同調査隊の日本側隊長、千葉大・加藤晋平教授の言葉をかみしめながら、アラシャン・ハダの奇岩の下に広がるモンゴル高原の大草原を眺めていると、ここを疾駆したさまざまな民族の馬ていの響きが、風に乗って伝わってくるような気がした。はるか東の丘の下を走る黒い線は、オノン川の支流、ホルホ川の岸辺の樹木の列だ。

ここの奇岩に残された文字は、漢字、突厥（とっけつ）文字、契丹（きったん）文字、ペルシャ文字、チベット文字、モンゴル文字、フビライの時代につくられたパスパ文字。それらが、高さ約八メートル、幅約九メートルの岩面にびっしりと二十か所近くにわたって記されている。これほど多種多様の文字が集中して発見された例は、世界でも珍しい。このニュースを知った村上正二都立大名誉教授は、「中国の居庸関（きょようかん＝漢字など六種類の文字で経文が刻まれている）に匹敵する」とまで評した。

何といっても最大の発見は「大明皇帝着來」の漢字。五十万の大軍を率いて明の永楽帝がこの地に親征を行ったのは



永楽八年（一四一〇）。「明史」永楽八年の条に、同年五月、タタール（元朝系の東蒙古族）のボヤンシル汗（ハーン＝王）の主力を打ち破り、ボヤンシル汗はわずか七騎で逃げ去ったと記されている。

この墨書は全部で五行。「大明皇帝」の部分は三行目で、二行目は「奉」一字。他の三行は解読ができなかった。だが、本紙の記事を読んだ中国・復旦大歴史地理所教授で、茨城大で教べんをとる周振鶴氏から、四行目は「錦衣衛」と判読できるとの指摘があった。「錦衣衛」とは「明史」にも出てくる皇帝直属の部隊。永楽帝の親征をさらに補強する材料となった。

また、契丹族が建てた遼の北モンゴルへの進出を示す「天重熙（じゅうき）四年九月十五日□」の契丹文字も重要な発見だった。遼の年号、重熙四年は一〇三五年、契丹がモンゴルへの進出を繰り返していた第七代興宗の時代。「遼史・地理史」には次のような記述がある。

「皮被（ひひ）河城北辺を控え、兵五百の防戍（ぼうじゅ）を置く。皮被河回グル（ウイグル）の北を出で、東南に羽厥（うけつ）を経て臚ロク河に入る」

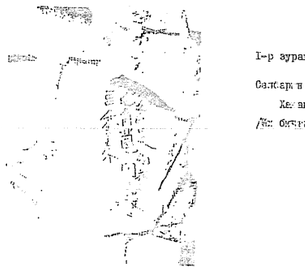
皮被河城とは、アラシャン・ハダから南東へ約百七十キロの町、ウンドラハーンの近くに遺跡として残る遼の城、ズーン・ヘレムのこと。臚ロク河は、ゴルバン・ゴル計画の昨年度の調査地域だったヘルレン川を指している。この墨書もまた、「遼史」の記述に見られる当時の政治状況を裏付ける重要な考古資料となった。

④サルバル＝オール銘文（契丹文字）

先行研究

・Kh. Perlee, “Kidanchuudyn bichgijn dursgal mongoloos oldson n’.” *Khel zokhiol sudlal* 13, 1979, pp. 15-30.
（Kh. ペルレー（著）「契丹人の文字資料がモンゴルで発見されたことについて」『言語研究』13, 1979, pp. 15-30.）
「2. サルバル＝オールのビチグト＝ハナン（ハダン）における【契丹】大字と小字」として，契丹文字による２つの銘文に言及。

・松川節（著）『図説・モンゴル歴史紀行』1998, p. 37.
・Dashnyam, L. (ed.) *Mongol nutag dakh tuukh soyolyn dursgal.* 1999, pp. 229-230.



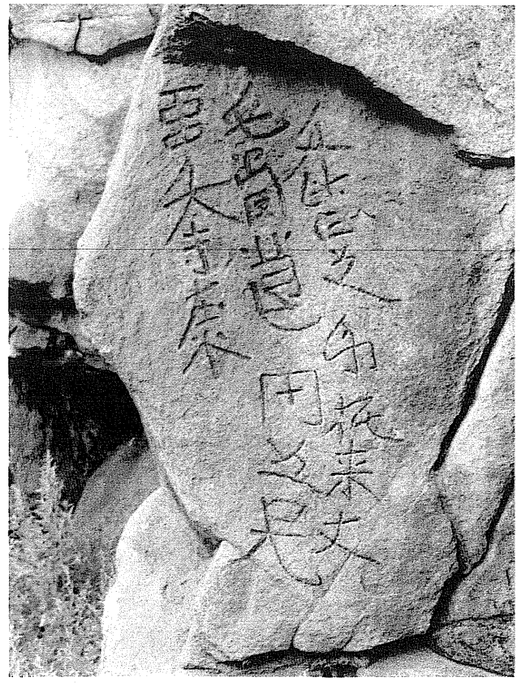












・日本・モンゴル共同「ゴルバン・ゴル」計画（1992年調査成果）
『讀賣新聞』1992年6月12日付け（東京版朝刊30頁）

ゴルバン・ゴル調査隊　契丹碑文を解読　26字中の7字　刻まれた年代判明

【ヘルレン・トーノキャンプ（モンゴル東部）11日＝片岡正人】チンギス・ハーンの陵墓を探索する日本とモンゴルのゴルバン・ゴル合同学術調査隊は十一日までに、ヘンティー県ウンドル・ハーンの近くにある「ハナ・ハダの契丹（きったん）文字碑文」の一部解読に成功した。

解読できたのは、四行二十六字ある碑文のうち、最後の行の七字。「大康十年（一〇八四）五月日」と読め、この碑文が記された年代が明らかになった。一〇八四年はチンギス・ハーンが少年のころにモンゴルの部族長だったアンバガイ・ハーンの前の部族長ハブル・ハーンが、初めて遼に使者を送った年にあたり、北アジア史の貴重な資料として注目される。

碑文は標高約一、二五〇メートルの山の頂上付近にある南西向きの岩壁に刻まれていた。その近くには、遼代の巨大な城郭址（し）ズーン・ヘルム、バルン・ヘルムがある。

この城郭址は、中国の正史「遼史」の「地理志」に、「五百の兵が駐屯していた」と紹介される「皮被河（ピーベーホー）城」と見られているもの。

契丹碑文には、「兵隊」と読み取ることのできる文字もあり、同調査隊日本側隊長の加藤晋平千葉大教授は、「北の脅威に備えるため、防人（さきもり）として派遣された部隊が、記念に刻んだものではないか」と内容を推測している。

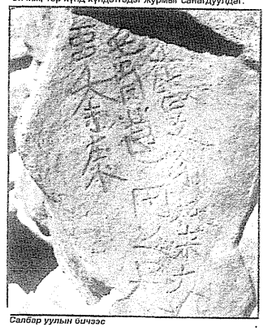
Монгол нутаг дахь туух, соёлын дурс

САЛБАР УУЛЫН БИЧИГТ ХАНАНГИЙН ИХ БАГА БИЧЭЭС

Монгол улсын Өмнөговь аймгийн Мэрэн сумын нутагт Өндөрхан хотоос баруун тийш 30 км зайд Салбар хэмээх уул оршдог. Салбар уулын Хөнөн хадны бичээсийн тухай анх XIX зууны эцсээр академич В.Радловын “Орхоны экспедицийн тайлан”-нд орсон байжээ. Судар бичгийн хүрээлэнг байгуулагдсны дараахан тус хүрээлэнгийн жижэнэ гишүүн Ч.Бат-Очир түүнийг бичгээн узэж хуулж ирсэн бэ 1940 онд Ц.Пунцагноров газар зүйн экспедицэд оролцон явахдаа бас нэгэн хагас хуулбар авчирчээ.

1952 онд археологич Х.Перлээ Киданы хот судлах экспедиц удирдаж явахдаа Салбарын Бичигт ханаид очиж бичээсийг гараар хуулж дэргэд нь сийлсэн тамган дүрс 16 байсныг зурж авсан байна. Түүнээс хойш Чехословакийн П.Поуха, Зөвлөлтийн археологич Э.Шавкуков нар уул бичээсийг хуулж дэргэд нь байсан булшийг Х.Перлээгийн удирдлагаар малтжээ.

Салбарын Бичигт ханангийн бичээс их бага хэмжээтэй бүрдэг. Их бичээс нь 3 мөр, 17 дүрс үсэг, бага бичээс нь 1 мөр, 7 дүрс үсэг юм. Их бичээс нь үншиж хүний баруун гар талд, бага бичээс нь голгой гар талд тус тусдаа сийлэгдэнэ. Ажилтан узвэл, бага бичээс нь их бичээсийн тэтгэсэн он сар нь шиг сэтгэгдэл төрүүлдэг. Их бичээсийг ажиглавал, 1-р мөр нь бусдаасаа богинохон дөрвөхэн үгтэй боловч 2-р мөрөөс бага зэрэг өргөж дээдлэн тэтгэсэн байдалтай, 2-р мөр нь 3-р мөрөөс бас бага зэрэг доор сийлэгдсэн байна. Бичээсийн мөрүүдийг тийнхүү дээр, дунд, доогуур эхлэж сийлсэн байдал нь монголчууд бичиг хэрэг хөтлөлтөнд бариманлаг байсан, нөөлөх том хүний нийгэмд эзлэх бэйр, эрх ямбыг харгалзан түүний цол хэргэм, алдар нэрийг бүтээ айдсан, зарлиг бууглаасан, захиран тушаасан үгийн эхний үсгийг дээр, дунд, доохноос эхлэн бичиж, тэр хүнд хүндэтгэлэг жүрмыг санагдуулдаг.



Салбар уулын бичээс

Тэмдэглүүлтэй нэгэн зүйл бол, Салбарын бичигт ханангийн бичээсийн тамган дүрс өгөршин бүдэгэрч зарим нь холтрон оргуй алга болсон хийгээд 'анц нэгэн тамган дүрс хадны хаг дотроос үзэгдэг байна. Эдгээр тамган дүрсийг Рашаан хад, Мөрт, Цагаан 'ол зэрэг газрын тамга, хүнну монгол овгийн тамга, гүргийн руни үсэг бэ монгол овгийн тамгатай тус тус гуллаж үзэхэд 1-9 удаа ижилссэн бүүу хувилбар ялгагдастай байжээ.

Эрдэмтэн Х.Перлээ Салбарын Бичигт Ханангийн бичээс, 5олон тамган дүрс зэргийг судлавд Х.Төн X-XI зууны киданд улсын их бичигтэй холбон үзэж, уг дүрсгэлэг ийдээгдийн удам нь бүсвд газрын хадны тамган дүрс ойроогоодтой нийтлэг гаралтай бөгөөд хожим монгол эрийн дор ондоошин үлдсэн гэж үрдчилсан дүгнэлт ийсэн билээ.

Холбогдох ном зохиол:
Х.Перлээ. Киданчуудын бичгийн дурсгал Монголоос олдсон нь. “Хэл зохиол судлал”. XIII боть 3-р дэвтэр. УБ, 1979. 15-30-р тал.

による図面。調査では、地中にある遺物を探るハイテク機器まで使われた。
（写真　江本利伸）

刻匠の旧に発見された各様の文字。右は明の永楽帝のモンゴリア親征に間違して使臣がつかわされたことを伝える石碑銘「大明皇帝詔燕」。左は未解読のままの契丹文字銘文。
（写真　2点とも江本利伸）

れらは、モンゴルが軍靴の駐留から世界帝国の支配者へと脱皮するための最初の芸登つくりであった。

モンゴル高原にジンギスの足跡を探すことは意外とむつかしい。ジンギス自身が遠征に明け暮れ、部面短段の余裕がなかったことや、文字を使った文書伝達をおこなっていた証拠も残られていないことを考えれば、これは当然かもしれない。ただしジンギスの墓だけは別である。

一二二七年、ジンギスは西夏遠征の途上、没した。その正体は、彼の生地のオノン、ケルレン、トーラ三河源流域に展され、漢文史料によると、この地の「起輦谷」に埋葬された。以後、モンゴル時代の歴代大カーンの多くもこの「起輦谷」に葬られたため、ポスト・モンゴル時代以降、現在に至るまで、この三河源流域は「大禁地」としてモンゴル人たちの崇拝を呼める聖なる地であり続けている。しかし、この「起輦谷」が実際にどこにあるのかは明らかにされておらず、モンゴル史における大きな問題として注目されてきた。